

Q16 保護者との連携はどのように図ればよいのですか。

不登校の状態にある児童生徒や保護者は、自信をなくしたり不安になったりすることがあります。特に保護者は混乱することが多くあります。親子がそれぞれに一番求めていることは、「つらさを分かっただけほしい」ということです。一緒に考え、一緒に歩もうとしてくれる良き理解者を求めているのです。そのために教職員ができることは、まず保護者を理解することから始まります。

1 連携の基本姿勢

(1) まずは保護者に温かな心を

不登校の状態にある児童生徒の保護者に一番伝えたいことは、「児童生徒の自立のための応援者」という基本姿勢です。「学校に戻すこと」を優先にして保護者との連携を図ると、ますます児童生徒を追い込んでしまうことにもなりかねません。また、不登校は家庭の問題として原因追及するような姿勢も、解決の妨げになります。

(2) 保護者と願いの共有を

児童生徒にとって一番つらいのは、「不登校を十分に理解せず、まじめで熱心で何とかしようと一生懸命な先生」です。まずは十分理解することが鍵です。十分な理解の上で、願いを共有しましょう。そして、児童生徒の元気回復のために、互いに何ができるか、思いを十分に出し合って話し合うことが必要です。

保護者の混乱期には、学校への注文が多くなることがありますが、児童生徒の元気回復につながるかどうかを一緒に検討して、少しでもその可能性があるのなら取り組んでみる価値はあります。

(3) 保護者にできること・学校にできること

保護者にできること

多くの保護者は、我が子が不登校になると、「何故学校へ行けないのか」という原因探しや、「どうすれば学校へ行くことができるようになるのか」という再登校させるための即効性のある方法を求めがちです。そのことにより、我が子の今の心情が理解できず、子どもを見守ったり支えたりする視点を見失うことが多いのです。

不登校やその要因を克服するためには、不登校児童生徒自身の社会的な自立が必要であることを保護者に伝えたり、日々の生活の中で配慮が必要なことについて保護者と共に考え、保護者は不登校児童生徒の援助者であることを自覚してもらうことが大切です。保護者が不登校児童生徒の支援のキーパーソンであることを自覚したとき、不登校児童生徒への支援は豊かになります。

学校ができること

学校は、「君のことを心配しているよ」「君を待っているよ」「先生は君の味方だよ」というメッセージを送り続けることが最も大切です。その上で、学校のスタッフの中にスクールカウンセラーや相談員がいることなど様々な人的配置があることを伝え、本人や保護者の求める支援が可能になるよう配慮していくことが大切です。

2 家庭訪問のポイント

【参考資料】「不登校・変容過程の一つのモデル」を参照のこと

(1) 不登校初期の家庭訪問での配慮事項

- ・いつ 忙しくとも教員の都合を優先しない。「お邪魔してゆっくりお話を伺いたいのですが、いつがよろしいでしょうか。」(選択可能な時間帯を告げる。)
- ・どこで その場に子どもがいない方がよい場合や、祖父母と同居の場合等、家庭への訪問を歓迎されない場合もある。保護者の意向を汲んで場所を決める。
- ・だれが 担任が原則。しかし、不登校の原因に直接担任がかかわっているような場合は、必ずしも担任でなくともよい。何のための訪問かによって、養護教諭、学年主任、相談員等、校内外の関係者の中から選んで訪問する。
- ・何を 状況の把握。丁寧に子どもの状態や子どもの言い分、保護者の思いや混乱を受け止め、何が課題かをつかむ努力をする。
- ・どのように 共感的な態度で傾聴に徹する。決して責めない。ねぎらうこと、誉めること。必要に応じてアドバイスして方向性を与える。
- ・何から 保護者の問いには誠意をもって答える。学校と家庭、教員と保護者が手を携え、不登校を乗り越えるためにそれぞれのできることから始める。

(2) 不登校が長期化した場合の家庭訪問

児童生徒の生活状況を把握し、小さな変化を見つけ、それを認め、誉める。

小さな変化の積み重ねが大きな変化につながることを伝えることで、自信が生まれま
す。そのためには、児童生徒の日々の生活ぶりを丁寧に聞き出すことが必要です。その
上で、その変化を自覚させるために誉めることとねぎらうことが大切です。

「見捨てられ不安」を起こさせない。

定期的に訪問し、丁寧に状況を聴くとともに、学校での受け入れ体制ができてい
ることを伝えます。また、場合によっては、学習補充のための個別学習支援を提案して実施
することは、本人や保護者に安心感と勇気を与えることとなります。

学校生活の状況についてはあまり詳しくは伝えない。

長期化した不登校の場合、学校の様子や級友たちの頑張りぶりを伝えることが、逆に
学校を遠い存在にし、忌避感情を高めることにつながります。「学校」「友達」「学習」
に関する情報は、聞かれれば答える程度にする配慮が必要です。

(3) 家庭との信頼関係が築けない場合の訪問

家庭から「しばらくそっとしておいてほしい」「家庭訪問をしばらく見合わせてほし
い」と言われたら、今までのかかわりを振り返りましょう。

「学校」や「先生」という存在は、不登校児童生徒と家庭にとっては重く大きく特別な
ものです。それを拒むには、それなりの理由があります。もし、家庭訪問を拒まれたなら、
今までの家庭訪問やかかわりが、児童生徒や保護者に安心と勇気を与えているものになっ
ていなかったという反省に立たなければなりません。

学校が、不登校児童生徒や家庭の良き理解者に徹するということはとても難しいこと
です。不登校の態様によっては「担任」という存在そのものが登校刺激になって、つらい場
合もあります。これまでのかかわり方を見つめ、スクールカウンセラーや相談員、関係機
関との連携も視野に入れ、適切なかかわりができるように改善していきましょう。